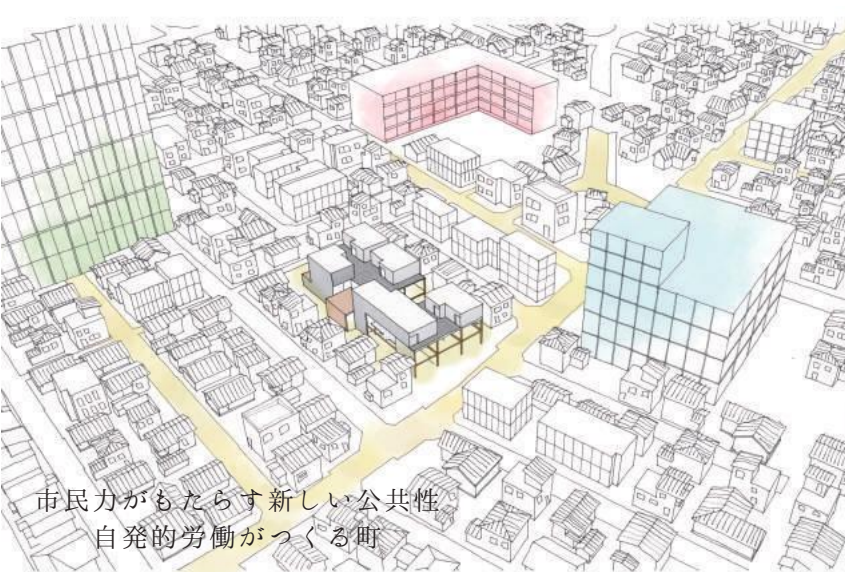
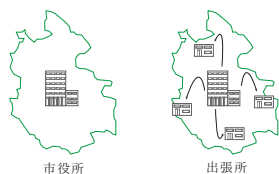




市民力がもたらす新しい公共性 自発的労働がつくる町

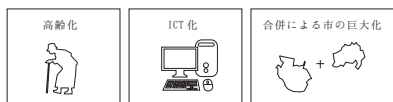
市役所の歴史



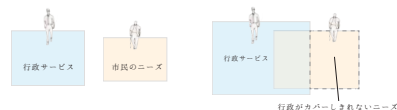
市の規模が大きくなると一定地域の駅付近に出張所という簡易的な建物を配置しているが、そこには申請手続きなどの市民管理部署ばかりが設けられており、市民生活をサポートする部署は設けられていない。

市役所のサービスと市民のニーズの漏れ

ニーズを多様化・高質化させる要因

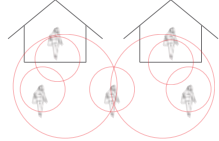


溢れる市民のニーズ



サービスの市場化はコミュニティを分断する

■生活（文化や家事）を通してモノの譲り合いなどの地域コミュニティが生まれる

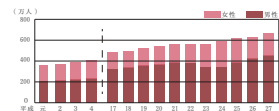


■サービスが市場化すると生活文化や地域の人間関係を分断してしまう

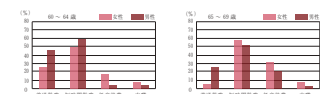


日本の高齢者就労状況

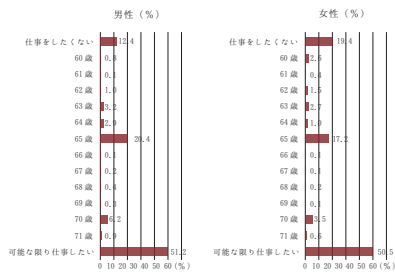
■高齢者就業率の推移



■高齢者が求める就業形態



■特定の年齢まで働きたいと考える高齢者



参加型自主管理労働「ワーカーズコレクティブ」

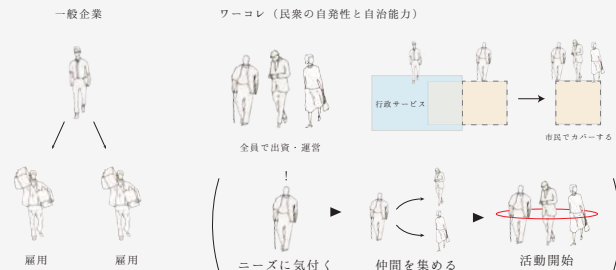
営利を目的とせず、地域貢献を第一目的に事業を行う人たちの協同組合

特殊な技能がいない生活者目線の些細な不満やニーズを解決することを生業とする

住民のニーズが多様化・高質化し、必要とされるサービス領域の中で、行政や企業が提供できない「隙間の領域」をカバーし得る、民衆の自発性と自治能力を基礎に置くラジカルな共同体である。



ワーカーズコレクティブの運用

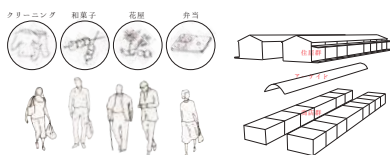


対象敷地

埼玉県越谷市 日の出商店街



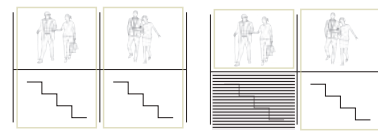
最寄駅から徒歩30分の住宅街にある小さな商店群。1960年代の武蔵野線開通による宅地開発の際に生き辛さを抱えた市民数名の力によって建ち上がった



生き辛さを抱えた市民数名が小さな仕事づくりを目指した

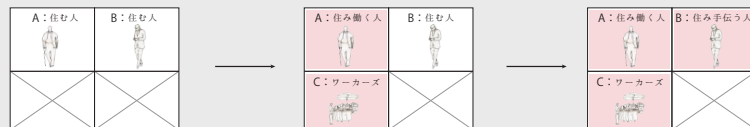


現状の下駄履き住宅群

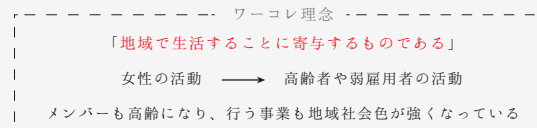


それぞれが別々の住居・階段を持つ 店を開く2階に住みこもり、孤立する

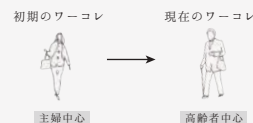
ワーカーズコレクティブ（キッチンとまと）が日の出商店街に生んだ関係性



店を開め、住民たちは2階にこもるようになってきている。その中で住民の1人がワーカーズに所属したことで1階にキッチンとまとが入ってきた。その際に「住み働く人」が誕生し、後に他の住民の一人がワーカーズと顔知りになることで「住み手伝う人」が誕生した。



ワーカーズコレクティブの起源



日本では1982年の神奈川県から始まり、当時は働いていない主婦が主体で介護サービスを行っていた。現在では高齢化が進み、ワーカーズに参加している者、参加する予定の者、連携者が高齢者となっている。

ワーカーズコレクティブ現状

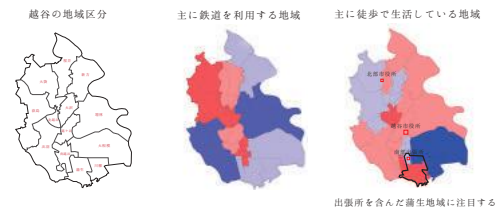


行政との連携はなく、それぞれが小さくバラバラに活動／参加人数や貢献度に限界

越谷市の年齢人口割合



越谷の交通利用状況



キッチンとまと

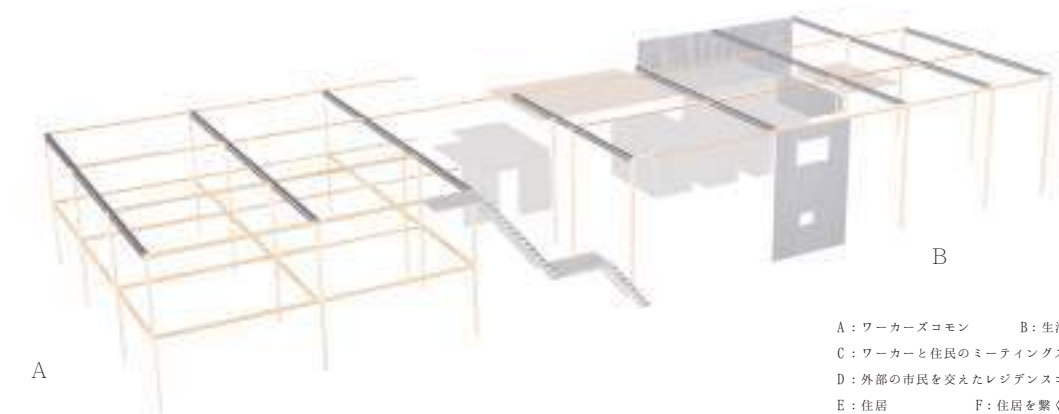
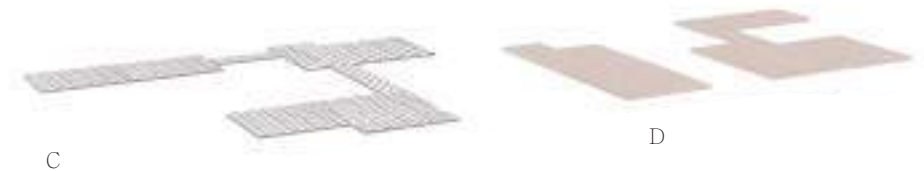


2011年に商店街に住む方がキッチンとまとに参加したことをきっかけにここに移転した。主に定年を迎え職を離れた高齢者たちが集まり活動している。越谷市の農家と連携し、越谷産の食材を使った弁当を毎日制作販売している。

職住を近づけた下駄履き住宅群



一昔前に住民数名が共同となり、住むことと働くことを近づけた商店群。それは下駄履き住宅群というビルディングタイプとして今も残っている。しかし下駄履き住宅は店を開いても上に住み続けるため、店舗だけ貸すことが困難であり、徐々にコミュニティは希薄化していく。

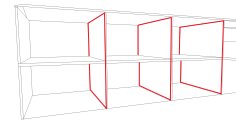


A: ワーカーズコモン B: 生活コア／既存店舗
C: ワーカーと住民のミーティングスペース
D: 外部の市民を交えたレジデンスコモン
E: 住居 F: 住居を繋ぐパーゴラ
G: 中層階に繋がるコンモンシャフト

現状の日の出商店街

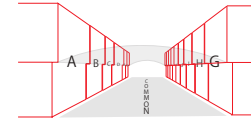
■個人棟が連続した下駄履き住宅群

日の出商店街はすべて下駄履き住宅で構成されている。それぞれは通じることなく、個人棟が連続した形である。



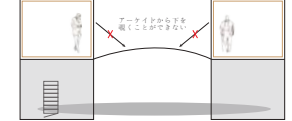
■向かい合うことによるスペース

下駄履き住宅群それぞれが向かい合うことで、路地空間が生まれ、唯一の共有スペースであるが店舗の閉鎖が続き、入りづらさを感じる

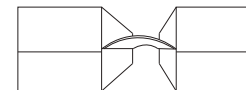


■「生きる活動をする」から「住まうこと」へ

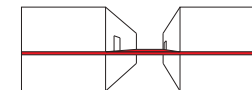
現状、アーケイドがフタをしており、住民は2階にこもってしまう。当初の共に生活する意識はただ住むことになってしまう



既存の形態を見直す



既存のアーケイド



アーケイドをスラブ化する



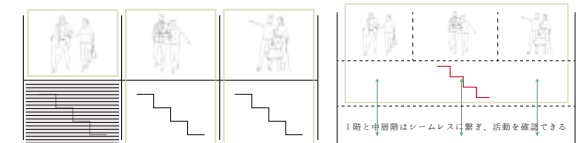
共用となる中層を挿入する

住居の再編



【既存】整列し、別々の住居群

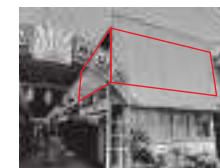
下駄履き住宅を見直す



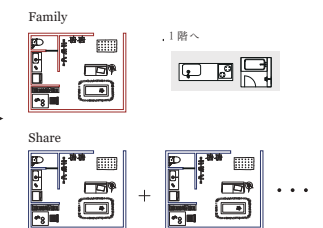
店を閉めると2階に住みこもり、孤立していく

住居の隔たりを弱め、階段及び中層を共有する

既存住居を最小限とする



キッチン・風呂を1階とし、ほとんどを共に1階で生活をしていくことを促す



【提案】ずらし、共用床・吹き抜けを設ける

ここに住む人々

Family

日の出に住む家族



1家族1住居で生活する



家族の生活

ももとの自営業をほかのワーカーと関わりながら営業していく

Share

日の出に住む単身者



単身者同士または意欲的な市民は住居をシェアし生活する



単身者／意欲ある市民の生活

ももとの自営業を止め、生きがいを失いかける住民と意欲ある市民が同居し下層のワーカーと知り合うことで、「手伝う」の関係を生む

建築の役割

市民の自由労働を誘発する



市民が参加 他人と出会い 手伝う・働く

窓口業務が労働をサポートする



① 市民労働のサポートをする
② 周辺市民のニーズを聞き入れる

既存の労働の整合性をとる

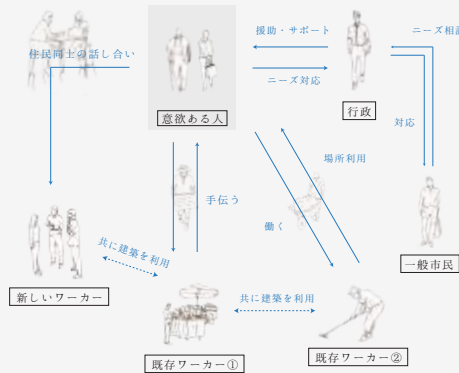


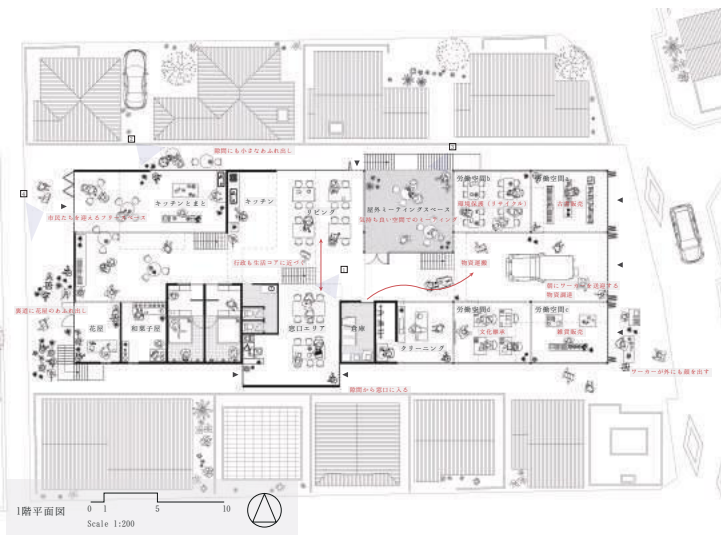
〇〇地域 △△地域
バラバラに活動しているワーカーが業務連携を始める

住宅街に相談役として窓口業務が最在する



住民・行政・ワーカーが建築内で関わり合う





1 窓口業務は生活コアに近づき、生活者日線で労働をサポートする



2 建築内に閉じこもっていた既存店舗も外にあふれる



5 中層は1階の活動を直に感じ「手伝う」の関係を誘発する



6 高さの違うリビングは多様な活動を同時に感じさせる



9 シェア住居内でも市民たちが生活のニーズを話し合う



10 住居を繋ぐパーゴラを通りコモンシャフトへと続く



3 住宅密集地に中庭が生まれ、気持ち良い空間で話し合う



4 裏道にも建築が開き、この道を利用する市民も活動を感じれる



7 住宅階から降りると必ずリビングにアクセスする



8 シャフトでは住民数を集め介護のワーカーなどが利用する



11 コモンシャフトは住民が毎朝晩、顔を合わせるきっかけをつくる



12 住居階の共用床では野菜を育てるなどの自主活動が顔を出す



既存からセットバックし、壁を減らす

周辺住宅からの見えを意識する



近接住宅に対して閉じ切った面



住宅の隙間からの見えに中庭を設ける



隙間から市民の活動を見る